

海田町旧千葉家のミステリーローズについて

泉川康博

ミステリーローズとは

ミステリーローズとは、寺社や教会・一般の庭や墓地などに残る、品種や由来の分からない古いバラの総称である。英語圏では Found Rose と言われており、和訳すると「(道端などで)見つかった(名称不明の)バラ」となる。Found の和訳が日本語ではなじみにくいので、直感的で分かりやすい「ミステリーローズ」の呼称が日本では定着したものと思われる。また、「ミステリーローズ」の定義には、古い文献に記載があるものの、現存しているか不明となったバラも含まれる。

世界的には、バラの原産地とは程遠いバミューダ諸島で次々と見つかった由来の不明なバラが知られている。また、1993年に中国雲南省の麗江路(リージャン・ロード)沿いで発見された'リージャンロード・クライマー'も Found Rose の一種とみなすことができる。

日本においては、十数種の原種バラが自生するほか、江戸時代以前に中国などから渡来した栽培種や原種のバラなどが知られていた。明治以降、欧米で改良された栽培種のバラが大量に導入されると、それ以前から日本にあった栽培種のバラは特段の注意を払われることなく忘れ去られてしまったが、今日になって名称不明の由来の古いバラとして、全国各地で相次いで発見・報告されることとなった。その中には千葉県の佐倉・堀田邸のミステリーローズや、長崎県の平戸のミステリーローズなど、地域ぐるみで保存活動が行われるようになったバラも存在する。また、1996年創刊のガーデン専門誌であるマイガーデン誌では、2014年 No.71以降、繰り返しミステリーローズの特集を組んでおり、こうしたバラの認知度は園芸愛好家の間で近年高まりつつある。

日本のミステリーローズの特徴

日本で見つかるミステリーローズの特徴として、チャイナ(Ch)系と呼ばれるコウシンバラ(*Rosa chinensis*)の血を引く系統、またはティー

(T)系の祖先とされる *R. × odolata* の系統と思われるものが多い。どちらも中国由来のバラであり、コウシンバラの系統は平安時代には日本にもたらされていたとされるが、*R. × odolata* については渡来時期が不明であり和名すら定まっていない。江戸時代後期に発刊された本草図譜で「ボタンバラ」あるいは「八丈バラ」として紹介されているものは、*R. × odolata* の系統のように思われるが、確定的ではない。

当園では、島根県津和野町在住の故小川次郎氏を通じて西周(にしあまね)旧居にある *R. × odolata* の系統と思われるものを過去に収集しているが、この個体は白砂伸夫氏によりマイガーデン誌 2018年 No.87 で写真付きで紹介されている。この個体は完全四季咲き性で、花色は白、剣弁の性質が見られるが、低温時は白い花弁と赤みがかった花弁が混じり、剣弁の性質が弱まりカップ咲きのようになる(図1)。



写真1 津和野町西周旧居のミステリーローズ
(写真は当園で晩秋に開花したもの)

海田町旧千葉家のミステリーローズ発見の経緯

2021年4月24日に、美術家で広島女学院大学教授の三榎正典氏から、名前の分からないバラがあるので同定してほしいと依頼があり、花の写真がメールで送られてきた。写真を見る限り、当園で *R. chinensis* と表示してバラの原種コーナーで展示している個体に似ており、発見場所を伺うと、広島県海田町にある旧千葉家住宅とのことであった。三榎氏は、海田町に自生地があるゲンカイツツジをモチーフにした屏風を制作し、旧千葉家住宅にて展示していたところ、このバラがちょうど満開を迎えており、筆者に連絡したというのが今回の経緯である。

西国街道沿いにある江戸時代の建築物が残る旧家であることから、由来の古いミステリーロー

ズの可能性が高いと思い、当該施設を管理している織田幹雄スクエアの館長である小谷幸子氏に連絡を取り、バラを見せていただくことにした。

4月27日に現地に伺うと、2.5mほどに育ったそのバラは旧千葉家住宅の玄関口付近に植栽されており、満開はやや過ぎたものの、赤紫色の花を見ることができた。花卉にはときおり白い筋が縦に入っているものが混じっており、やや剣弁の性質が現れていた。八重咲きだが花卉数は十数枚程度と多くはなく、開花後期と思われる花は黄色い花芯が中心に覗いていた。花形や先が尖る小葉の形状、刺の少ない枝などは、当園で *R. chinensis* と表示してある個体に非常によく似ており、古い時代に日本に渡来したコウシンバラの系統に間違いないと判断した。しかし、当園の個体は8～10月にかけて返り咲きが見られるが、小谷館長によると、旧千葉家の個体は返り咲きしたのを見たことはないとのことであった。返り咲きの性質は、植栽環境や剪定方法によって発現頻度が変化することもあり、今後、同一環境・同一管理で性質を詳細に比較する必要があるように思われた。

この個体には現在のところ名称が存在しないことから、「海田町旧千葉家のミステリーローズ」の呼称を提唱することとした。



写真2 海田町旧千葉家のミステリーローズ
(撮影：三樹正典)

旧千葉家住宅について

旧千葉家住宅は、近世山陽道（西国街道）の宿場町であった海田にあり、江戸時代は要人の休泊などにも使われた千葉家の旧宅である。

1945年に広島は原爆により壊滅的な被害を受けたが、旧千葉家住宅は爆心地からは約8キロ

東に離れていたため建物の損壊は免れた。また、戦後、約500m南東に国道2号線バイパスが整備される一方、旧千葉家のある旧街道は再開発されることもなく、江戸時代の貴重な建築物が今日まで残されることとなった。2013年に千葉家から海田町に本住宅が寄贈されると、一帯は海田公民館、織田幹雄記念館、旧千葉家住宅を擁する複合施設「織田幹雄スクエア」として整備されることとなった。

バラが保存された経緯

小谷館長によると、10年ほど前まで千葉家の関係者が旧千葉家住宅に隣接する敷地に居住しており、この名前の無いバラは、その裏庭であった場所に植栽されていた。この敷地は織田幹雄スクエアの駐車場として整備されているが、整備に当たり伐採するには惜しい大変美しいバラであったので、十数メートル離れた現在の位置に移植したとのことである（図3）。



写真3 旧千葉家の玄関口付近に移植されたミステリーローズ

さいごに

広島市近郊では、原爆の被害や、戦後の郊外にまで広がった都市化と住宅開発により、江戸時代の面影を残す建造物の多くが失われ、「ミステリーローズ」を発見することは難しいかのように思われた。しかし、幸運にも由来の古いバラが海田町の江戸時代に建築された旧家で保存されていたことは奇跡的で、大変意義深い発見だったと思われる。

小谷館長のご厚意により、このバラの穂木を提供いただいたので、植物公園にて挿木を行い、育成を行っている。今後、株を充実させ、より詳細に「海田町旧千葉家のミステリーローズ」の性質を調査することとしたい。